



Title	奥田或著「台湾の農業」
Author(s)	伊藤, 俊夫
Description	紹介
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 6, 170-172
Issue Date	1938-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10661
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p170-172.pdf



奥田 或著

『台灣の農業』

伊藤 俊 夫

北海道の農業を視察に見える人々が異口同音に發せられる設問の一つは、北海道の農業を理解するに手頃ない本はないかといふ質問である。私の乏しい経験によつて見ても遺憾ながら見あたらないと返事をするより外に仕方がないような譯で折角の期待を無にするのを心苦しく思つてゐる次第である。さういふ人々の要求は恐らく官廳式統計の單なる羅列や説明に終止してゐるものよりも、もつと學問的なアカデミックな知識を満足させるに足るような内容とその分析にあるように察せられるのである。北海道の農業の特殊性といつたものを示すにしてもさういふ人々の要求は、例へば酪農や薄荷の如き生産が何故に府縣に於てよりも北海道に於てより有利に生産せられるかといふ基本的な考察にまでほり下げてゆくことを欲してゐるようであ

る。この意味で北海道の農業を総合的に少くとも學問的に分析した著書のないことは淋しいことに違ひないのである。同じやうな事が臺灣や朝鮮に就いても安當するのではないだらうかと考へられる。このことが私の單なる主觀的な杞憂に過ぎなければ幸ひである。朝鮮のことは暫く措いて、臺灣の如く地理的位置から見ても北海道と對蹠的な土地は外には存在しないのであるから、若しも臺灣農業に就いて以上に述べたような意圖の下に書きあげられたものがあるとすれば、それはそれ自身として獨立の價値があると共に、間接にはそれと對蹠的な北海道の農業の理解にも大いに參考になることと信じられるのである。奥田或教授の『臺灣の農業』はこの意味でも極めて有益な勞作であることを疑はない。

二

周知の如く奥田教授は臺北大學理農學部に於て農業經濟を講じられてゐる臺灣農業經濟の權威であり、既に同教授、並に其他の臺北帝大關係者の論文を集録したる農林經濟論考第一輯、第二輯、を編纂されて臺灣農業の爲めに多大の貢獻をされてをられるのである。本書はその序文にもある如く、曩に公にせられた農業

經濟學會編『日本農業の展望』所載の『臺灣の農業』及び之を骨子として講演せられた『臺灣農業の特質』などの統計數字其他を修正せられて一つに纏めあげられたものである。その意圖は「臺灣農業を内地の農業と比較し其經營の乃至生産の特質性を考察し、以て等しく日本帝國の植民地たる朝鮮との比較に於て、兩地の内地農業に對する聯繫上の差異を看たのであつて、要は臺灣農業の特質を一般讀者に傳へんことを企圖したもので」あつて大體に於て成功してゐると思はれる。

本書の本文は三七頁、附録の統計表を合せて約百頁の小冊子であるから立入つた内容の説明をすることは差し控へよう。その内容を一瞥せば、一、緒言、二、自然、三、人、四、耕地、五、農産、六、植物生産、七、動物生産、八、經營式、九、經營の規模、一〇、集約度、一一、内臺貿易關係を通じて見たる臺灣の農業、一二、結言——臺灣農業の將來といつた具合になつてゐる。以上の各項目に互つていづれも内地との比較に於てその特質が把握されてゐるのが何といつても本書の強みであると共に學問的價値の存する所以であらう。そしてそれが臺灣の自然的條件とそれに對應する社會的條件（農業人口）との必然的な所産であること

も可成り分り易く説明せられてゐる。例へば臺灣農業が熱帶的で作付率が多く農産物が米、甘蔗を中心とし、役畜が水牛、用畜が豚であり、農業經營式が蕃地と普通行政區とで非常な相違の存すること或ひは母國たる内地農業との關係が朝鮮の如く相剋關係でなくして補助的關係であるが如きいづれも臺灣農業生産の自然的社會的必然に基くものであらう。朝鮮よりの内地への移出品が棉を除いては殆んど皆内地で生産なし得るものであるのに反して、臺灣よりの移出品は柑橘類芭蕉實鳳梨等内地農業の自給し得ぬものであることは、臺灣農業の重大な特質であつて臺灣農業の商品經濟的色彩を強めるのに役立ちうると共に植民地として必要不可欠であることを示すものであらう。著者は熱帶農産物を豊富に母國に供給することを臺灣農業の使命とすべきことを説くと共に所謂山地の開發利用が溫帶農産物自給上より必要なことを説いて本文を終つてゐるのは定に至言といつていい。

三

以上で甚だ簡單に失すると思はれるが本書の紹介を終ることとする。そして本書が臺灣農業を知る上にま

ことに手頃な本であることを躊躇なく推薦したのである。併し、この書はもとも農業政策や農史の方面のことは除いてあるからその方面の事情を知らうとするには不便であるがそれはそれぞれ適當な書物があると思はれるからそういふ書物を本書の内容と關聯する限りに於て指摘されたならばどれだけ未知の讀者を益するか分らないと思ふ。單に生産や經營の立場から書かれたとしても政策や歴史とは密接な交渉があるわけであるから例へば經營の規模の處で栽植農場の如きものはいまま少しその内容を説明するか乃至はその文獻(例へば『農林經濟論考』中の根岸氏論文等)を舉げてをかれたならばと望蜀の感に堪へぬ。何となればそれは單なる經營規模でなくその發生は歴史と關聯し政策と交渉せずしては理解されないからである。尙ほ一つ最後に私の甚だ思ひがけぬ疑問として(一に私の淺學に他ならぬかも知れない)述べることを許していただきたいそれは農業集約度として反當收量を指標として著者は臺灣農業の内地に比し生産力の劣り従つて農業技術改善の餘地の多いことを指摘されたが、そしてそれは一應尤も思はれるが、それは土地所有關係と何らかの關聯が存するのではなからうか?著者は農業生産に參與するものとしてこの土地所有關係から見た分

類は本文の三の人口に於ても四の耕地に於ても試みられてゐないのはどういふわけであるか。お答へが頂ければ私の望外の幸である。本書附録の統計表はいづれも學問的良心より作成されたものであつて官廳式統計の無味乾燥なると異り、極めてよく臺灣農業の地域性を認識せしむるに役立つものであらう。首評多罪、非禮の辭は呉々も御寛恕を乞ひ願ふものである。

(昭和十二年八月、養賢堂)
發賣、定價九十錢